

WHO 分類 (第 5 版) に基づく 骨軟部腫瘍の画像診断 update

序 説

野崎 太希 *

骨軟部腫瘍の WHO 分類が 2020 年に第 5 版として改訂されてから、既におおよそ 5 年が経過した。改訂を重ねるごとに発行間隔が短くなり、新知見の蓄積と研究の進歩が、まさに加速度的に進んでいることを実感する。今回の改訂では、分子遺伝学的解析法の著しい発展を背景に、他の領域と同様、臨床病理学的特徴ではなく分子遺伝子的特徴に基づいた名称の腫瘍がいくつか導入され、確定診断に分子遺伝学的解析が不可欠となる疾患が登場した。さらに、新たな分子標的薬の登場に伴って、治療方針に対応した分類も取り入れられた。

希少疾患である骨軟部腫瘍は、high-volume center に勤務しない限りは、1 人の放射線科医が経験できる症例数にはどうしても限りがある。多くの施設では、日常診療において放射線科医が骨軟部腫瘍の画像に遭遇した場合、まず求められるのは「良性か悪性か」の判断であり、悪性であれば「原発性か転移性か」を鑑別することである。すなわち、自施設で経過観察や治療を行えるのか、専門施設への紹介を推奨すべきかを見極める責任が生じる。そのため本特集では、WHO 分類に基づく骨軟部腫瘍の各論に加え、鑑別すべき良性骨軟部病変および転移性骨軟部腫瘍の画像診断にも焦点を当てた構成とした。

総論では、骨軟部病理の第一人者であり、日本医学放射線学会・骨軟部放射線研究会において毎年、病理コメンテーターとしてお世話になってい

る獨協医科大学日光医療センターの山口岳彦先生に、骨軟部腫瘍の WHO 分類の変遷と今回の改訂の要点についてご寄稿いただいた。また、悪性骨軟部腫瘍の外科治療および化学療法について、慶應義塾大学整形外科の骨軟部腫瘍班ならびに国立がん研究センター中央病院小児腫瘍科の先生方に、放射線科医向けにレポートで言及すべき画像診断のポイントを含めて、大変わかりやすくご解説いただいた。さらに、各論の画像診断については、日頃より数多くの骨軟部腫瘍・骨軟部疾患をみておられるエキスパートの放射線科の先生方にご執筆を賜った。

このように本特集では、新たな『WHO 分類 第 5 版』に基づいた骨軟部腫瘍の全体像を、古典的な“Jaffe の triangle” (病理医、放射線科医、整形外科医) に、腫瘍内科医を加えた真の学際的チーム医療の観点から、診断から手術・化学療法を含む集学的治療までを、1 冊でアップデートできる内容として企画したものである。

専修医からベテランの放射線科医まで、幅広い層の読者の皆様に、これまで“とっつきにくい”と感じられがちであった骨軟部腫瘍の画像診断の理解を深めていただき、明日からの診療に少しでもお役立っていただければ幸いである。最後に、ご多忙の折にもかかわらず、お時間を割いてご執筆の労をお取りいただいた先生方に、この場を借りて心より深く感謝申し上げます。

* 防衛医科大学校放射線医学講座

Taiki Nozaki Department of Radiology, National Defense Medical College